

耶蘇校長

岡田美知代

小説

實業之横濱定期増刊春の巻

(第四卷第一號)

「マア君そう頑固な事を云つたものぢや無いよ」と云つたのは、最早彼は四十でもあろうか、面長の頬髯美しく鼻筋の通つた目の清しい、けれ共恐しく口の大きい、郡視學駒木仁行で、役所の歸途を其儘らしい嘉平地平の袴に、奉書の羽織を着流して寒げに炬燵にすり寄り乍ら、差向に座つた堀校長を見入るのであつた。

「併し何と云つても僕は嫌だ」
 氣の無さ相に兎角俺が勝の今迄布團の綴糸をいぢつて居た校長は、ふと面を上げて斯う云つた、矢張り學校から歸つた計りの處らしく、黒羅紗の背廣をつけて、胸に垂れた時計の銀鎖には水晶の認印と、ニツケル製ハート形のメタルをつけて、それは大日本禁酒會員のしるしである。駒木よりは七八つも弟の色白で、下脹れの丸顔に鼻筋は通つたとは云へぬが女にはほしい程の口元、それを際立て、見せない爲めか、眉は濃過ぎて眼尻のあがつた具合、少々疳癩らしい、それに鐵枠の眼鏡をかけて居る
 「併しね堀君、浮世は君の思つてる様に即塵生やさしいものぢや無いよ」
 「左様とも僕だつて知つてる」
 「そんなら尙更ぢや無いか、決心し玉へ斷然決心し玉へ、左様さへしたなら今直ぐ百幾十圓の金も與へられる事だし、此

れて、主義をまげよと薦める自分は何と云ふ腑甲斐無い身か。
 「折角正しい君に這塵事をすゝめられた義理ぢや無い、それは僕にも解つてる、が左様しなやならんハメの僕を憐んで呉れ、而して嫌でもあらうが眼をつぶつて、ねえ君、お互に同じ村に産れて、時代こそ違へ、小學時代からの同窓ぢやないか、僕はね今度の事件が持上つて以來、甚麽ヤキモキ氣をもんでるか這塵忠告するの、つまりは僕が腑甲斐無いからとは云ひ條、種々事情も知つて、斯う成つた上はせめて君の前途よかれと祈ればこそ故里の親御も甚麽にか御心配だらうに、嫌でもあらうがねえ堀君、後藤が居たなら矢張り僕と同じ事を云ふに違ひない」
 「難有う君の御親切は多謝するよ」
 「左様云はれると恥入るが……」
 「併し君想つても見玉へ、それが出来る位なら、僕決して今日迄苦しんで居ない、が僕は信する、幾ら迫害が激しくても、尙二三の人は僕を信じて呉れると、否誰一人顧みて呉れなくても僕は好い、かまはない」
 「それや不可ない駄目だよ、左様成つちや最早、理も非も無く君は退職されなやならん、それをじつと待のは實に愚な話ぢや無いか」
 「仕方が無い、謹んで退職の命を待たう、最後迄僕は神の前に奮闘するからね、折角這塵に迄云つて呉れる君の御親切を、決して無視する譯は無いが、マア今暫く僕の自由を任せて呉れ玉へ僕は此場合自分から身をひく譯は無いと思ふ」
 それで二人は押黙つた儘と思ひ思ひの事に思ひ入つた。

方から退職を願出た譯に成つて、第一人間さも違はらじや無いか、ねえ君悪い事は云はない是非左様し玉へ、君程の伎倆を持つて何も這塵土地にいちめられて計り居ないでも、世間は廣い、君を知つて呉れる處へ轉じて思ふ存分、教育事業に就いての改良も行ふさ、遮二無二我を通して不結果を待つた處で、君の所謂神の御心でもあるまい、殊に神は愛也さ、ねえ君、君が今此處を去つて他に發展の地を求めたからつて決して罪ぢやあるまい、實際此儘うちやつて置くと大變な事に成る」
 「左様だらう」
 「オイオイ困るせ君、人事ぢや無いよ思つても見玉へ、郡長の意向は已に明かだう、町民は君を排斥してる、此場合君が唯一言諾と返事をして呉れたなら、僕は甚麽に嬉れしいかほんの一枚、退職願ひに添えて病氣の爲め職に堪へぬからと云ふ、醫者の診斷書を出せば濟む、それには幸鈴木さんは耶蘇で君の方の仲間だから、事情を打明けて頼みや譯無しさね諾と云ひ玉へ諾と」
 「併し僕は決して病氣ぢや無い」
 「それは解つてる、け共誰が調べに来るものか、サア決心し玉へ、鈴木さんへ一所に行かう、診斷書一枚で濟むんだよ」
 「マア君静にし玉へ、僕は嫌だ」
 相變らず澄まして居るので視學は齒痒くも成つて、結局怒つても見たが又静に考へると、何處迄も校長は正しく職の爲とは云へ、視學ともあらうものが、罪無くて責めらるゝ友の爲め何一つ盡そうとはせず、其上に自らの地位の危からむを恐

【三】

堀儀作が此町に來たのは一昨年六月で、以前は山陰道境の高野山高等小學校に勤めて居たのであるが、親友の後藤上高等小學校校長が、甲奴郡視學に榮轉の際、是非後任には堀をと郡長に乞ふて縣廳の許可を得た。元來甲奴郡には上下本郷稻草の三高等小學校があつて、中にも上下町は郡中第一の都會でもあり、從つて學校も盛大に生徒の數も多し萬事調つて居るのである。例の街道に沿ふた細長い一筋町、取立て、云ふ程の殖産工業も無いが、近村に小作人を持つた地主が多く、自然田舎には似ぬ家並も美しい、で先年芦品郡から分れて、甲奴郡役所を此處にひいて以來、一層景氣付いたもの、様に、藝妓の數はかりも二十人はある。

此の小さな町に此藝妓、以て如何に此町の風俗が亂れて、盛風が盛に行はれて居るかは知れやう、四十面下げた分別盛りの町長を始め、郵便局長、銀行の監査役此様なお歴々が眞先きに立つて先達するの、若し者は好い氣に成つて茶屋小屋に入り浸り、出來秋は尙更、大抵の料理店は夜の二時三時頃迄、三味や太鼓で大騒ぎをやつて居るのである。殊に郡長の酒と來たら、それは、お話にも何にも成つたものぢや無い、郡役所に勤る者は誰彼の差別無く皆貴様呼ばりされた上是非御酒の御相手を勤めなければならぬのである。此様な土地柄として禁酒會等の盛になりやう道理は無い、ドクトル鈴木を會長に、耶蘇教の傳道師、労働者ではあるが基督教徒の石原と會員は極めて少數に過ぎない、否折々入會する者が無いでは無いが、兎角烈しい迫害が堪へ切れず云ひ

小説

實業之横濱定期増刊春の巻

(第四卷第一號)

甲斐無く誓を破るので、後藤視學も何方かと云へば酒黨の、堀も其仲間であつて、高野山では酒の上での面白い話も無いではないとの噂、けれ共上不明に來て一年——昨年の五月以來何に感じてか、非常な決心を以て禁酒會へ入會した、これについては随分迫害もあつたが、後藤視學の蔭乍らの保護もあつて、今日迄續け來つた、併し後藤は何やら彼やら面白からぬ事が積つて、終に病氣と云つて故山に歸つた、で堀は愈々頼り無い境遇に居なければならぬやうに成つた、けれ共周圍から悪く仕向けられ、仕向けられるだけ、ま、つ兒あつかひにすればされるだけ校長は却て刺激され、尙嚴かに其職務を守るのであつた。其後堀は感ずる處あつて、基督敎を研究したが、八月には夏期講習を利用して廣島へ出て、盛に基督敎の集會へ出たが、九十一月と、其年の十二月十五日を以て愈々、町の講義所で、其爲めわざ／＼廣島から出張した米國宣教師により聖バプテスマを受けて、耶蘇信徒となつた事を人々の前に告白した。

サア事は起つた。町民の驚ろきは實に非常なもので、中には宛ら露探でもあるかのやうに噂する者さへあつたが、それはたゞに無教育な者の言葉では無く、町のお歴々、殊に學務委員は、其祖父が神官で、西洋と云へば何でも彼でも大嫌ひ、毛布を用ひるにも、是は外國から渡つたもの故尻の下に敷いてやるのだと云つた風な家庭に育つた爲め、平常から耶蘇にも大反對、苟しくも神國の民として異敎を信するは、國體を汚す處の國賊であると云ふので、郡長をおだてるやら、町長と結托して排斥の運動に取りかゝるやら堀の前には忽

ち大きな十字架が表はれたのである。

一月六日、此日は新年宴會を兼ねて、甲奴郡出身の凱旋兵を歓迎すべく、上下高等小學校に於て盛大なる會は催された。今しも大きな聲で『あな嬉れし、喜ばし』と凱旋の唱歌を歌ひ乍ら鈴木家の玄關に飛込んだのは、駒木郡視學で、フロツクコートは恐しく泥に汚れて居る。

「おい鈴木君、駒木仁行だよ歓迎して呉れ玉へ、酒はいらない、奥さん失禮だがおひやを一杯」
 「酷く眞面目です、君芳醉樓と間違へたんどや無いか、併しマアあがり玉へ」
 「否鈴木君、俺ア禁酒するよ」

「何故ね」
 「實際酒はよくないね、俺ア染々感じたよ」
 「それは結構」
 「併しだ、俺ア君の會なんぞへ入つて其制裁で以てやすやうな、其塵卑屈な眞似はしない、よすと云つたら本當によす、決して飲まないけれ共會へは入らない」

「それで本當に禁酒が續けば好いさ、併し君の禁酒も随分度なもんさね」
 「否左様罵倒し玉ふな、今度こそ屹度々々成功して見せる、併し禁酒會員にやならん」
 「ハハッ堀校長の様に迫害されちや大變だ」
 「否堀も氣の毒なものさね、それに就いて」
 「一段聲をひそめて、堀は其後何か相談に來ましたかい」

「いや別に」と鈴木はけんらしい目を發した。
 「はてな」と首をかしげたが「折入つて君に御願ひがある、堀君の爲め病氣の診斷書を一枚書いて被下らんか」と急に眞面目になる。

「一體如何したと云ふので……」
 「實はね、最早君も御存じだらうが、堀の一身上に大問題が起つてんだ、此儘に置けば退職は分り切つて居る、それに堀には借金がある、今此處を立退くとして我々の身にや随分大金を要するです、で僕親友のよしみにせめてと、百方苦心の結果堀の爲めに將來大に發展の餘地を與へて置いた、が併し病氣に付き職に堪へぬと云ふ醫師の診斷書が無い事にはすつかり駄目なので、それさへ有れや百幾十圓の金が今直ぐ下がるんです、ねえだから是非書いて呉れ玉へ」

「それや書かないとは云はんが、堀君からまた何ともお話があつたぢや無し如何云ふ心算か第一本人に聞て見なくちや」
 「其處だ、今に相談に來るでせうか、何だか頑固な事計り云つてるんで、君が傍から好い様にして書いて被下る、甚麼に都合都合だかねえ君大に盡力して玉れ呉へ」
 「併し……」

「否頼みましたぞ、實際堀は君を信じてるから、頼む、發展の餘地を、ねえ君、鈴木君」
 と又も大醉の様子で何を云つてもお通じなし。

實際堀には憐れな事情があつて、今日此頃の煩悶もそれ故である、と云ふのは別でも無い、ちとばかり荷に餘る借金が

あるので、酒も吞ますの夫婦二人暮し、何としての疑ひもあらうが、人の身には見掛けに寄らぬ苦勞もあれば係類もあるもの、卒業後何ヶ年間と云ふ義務年限に身をくゝらるゝ師範校へ入るには、餘程の献身的人物で無い限り、何れも親元の豊ならねばこそ、堀の實家もそれにはもれぬ貧しい荒物屋で、昨年の春以來妹のおたけが病つて一層慘を極め、月々の手當以外随分多額な金子を仕送つたのであるが、其金の出所は何所、ついでに借金に成つて、後藤視學の後任駒木は、幸同郷の知り合つたなかとて、相談の上、果ては月給の前借迄して居るのである。

「あ、これさへ無かつたなら」とは思案の果てを堀の口を衝いて出る言葉。
 兎角のうちに正月も暮れて、早や今日は二月に入つてからの二日目である。金曜日の事とて、例の祈禱會に後れぬ様に、甲斐々々しい妻の注意に、少しく早目に夕餉を濟ました處へ、郡役所からの小使で、親展と記された一封の信書を渡された、けれ共封を切る迄まさかこれであらうとは思ひ掛けなかつたので、否手に執つた時、何だか常ならず堅い様にも思つたが、終にそれと氣付かなかつた中には一葉の辭令が入つて居て、小學校條例第二百七條に依り、退職を命ずるもの也と一月三十一日の日付けを以て、チャンと立派に縣廳の判がある。
 町今迄教へ來つた愛子等とも、別れて行かねばならぬのか、と此思ひは電の様に堀の胸を打つた、全智全能の神様で無い限り、自分だとして缺點はあらう、神を知らず人の道を知らな

かつた昔を顧れば、空恐しうも恥しうも成つて、人の子を損つたとの責めを甘じて受けねばならぬ、けれどキリストの血によつて聖められ、些か正義の何たるを辨へて以來、講壇に立つて同じ修身の話をすることも、何とやら力ある様に自分と感ぜ、行末樂しうも思つたものを、それすら町民の嫌ふ處と云ふならば、あゝ是非も無い。

堀は辭令を見入つた儘、思はずも暗涙にむせんだ。と妻は遠に途方に暮たもの、やう『案外御早う御座いましたのね』

『否兼て期しての上だから』

とは云ふもの、堀も又暫時腕組みの儘思ひ沈だが、やがて黙禱を捧げて、尙頑固なる町民の爲め神の御免しを乞ふのであつた。

折柄通りすがりの若い衆が三四人『耶蘇校長の退職堀ヤーイ』とはやして、ばらばらと駈け出した。

〔完〕